

## 性の歴史ゼミ

ミシェル・フーコー

『性の歴史Ⅰ 知への意志』1976年(渡辺守章訳 新潮社 1986年)

『知の考古学』1969年(中村雄二郎訳 河出書房新社 1981年)

内田隆三『ミシェル・フーコー』(講談社現代新書 1990年)

岸田秀『性的唯幻論序説』(文春新書 1999年)

報告：水崎富美\*

本ゼミでは性・セクシュアリティ研究の基本的な文献であるミシェル・フーコー(1926-1984)の『性の歴史Ⅰ 知への意志』1976年(渡辺守章訳、新潮社、1986年)を輪読形式で検討した。フーコーは、レビ・ストロースやアルチュセールとともに1960年代後半の構造主義の代表的な哲学者である。

本書は、フーコーにおいてそれまで不在であった「性の問題」が中心に据えられ、古代ギリシャ、ローマから現代にいたるまでのその諸相が描き出されたところに最大の特徴があるとされている。

フーコー自身がこの著作を自己の研究の中でどのように位置付けていたかについては、内田隆三が次のようにまとめている。晩年になってフーコーは「主体」の問題を振り返っている。これまで自分は「主体」(subject)の問題を三重の仕方を取り扱ってきており、それは、第一に医学や人文諸科学のなかで行われた人間の主体化であり、第二に狂気、病、犯罪などを分割し、排除する実践のなかで行われた人間の主体化であり、第三に性的な欲望を通して行われた人間の主体化である。著作『狂気の歴史』から『言葉と物』を経て、本書『性の歴史Ⅰ 知への意志』にいたる研究は、最初の二つの主体化を中心に扱っている。

フーコーが『知への意志』において明らかにしようとしたのは、ヨーロッパ近代が作り出した「セクシュアリティ」というものの成立

の歴史的な仕組みの追求である。彼は、そこに貫かれ、その成立の場、枠組みとなっている「権力」(pouvoir)という力関係を解明しようとした。フーコーは、従来、理解されてきた「性」といえば「抑圧」といった自明の発想を疑った。そして、近代西洋社会において「性」をめぐる発生した様々な現象を追跡し、大規模な装置としての「性の言説化」「性の言説の煽動」というものが存在していたことを明らかにした。

つまり、権力は常に性に関係する領域を抑圧、排除、検閲しているとされるが、実際には、権力は性について一様に否定的作用を及ぼしているわけではない。むしろ告白や尋問というかたちで権力は「性の言説化を煽動」し、セクシュアリティの領域を積極的に生み出すということである。「隠す」という義務も、告白や尋問をより重要で厳格な儀式として機能させるための戦略であるとした。

ゼミではフランスにおけるマルチヌ・セガレーヌの『妻と夫の社会史』、ジャック・ソレの『性愛の社会史』等との比較、また、日本の近世および近代の状況とを比較しながら議論をすすめた。そもそも日本人の中には「主体」というものがあるのか、これほどまでに性にこだわり、罪や欲望との関連で性を捉える発想の根底にいかなるものがあるのか、〈罪として〉の性、〈恥として〉の性など、キリスト教的世界と日本の違いが検討された。

\*法政大学非常勤講師

フーコーが問題にした性の諸相は、日本の民衆レベルの認識と必ずしも一致したものとは言い難い。しかし、この点において、近代日本の性のあり方や性教育を歴史的に相対化し、構造化する意味があるように思えた。

また、現在、本研究室では、パース・コントロール・レビューの分析によって 1920～30 年代の国際的な産児調節運動の実態と当時のフェミニズムと性をめぐる課題を明らかにしようとしている。それにかかわって、本ゼミでの検討は、キリスト教的文化圏の性に対する認識や日本の性についての認識を理解・分析するための基本的作業として、極めて意義深いものであったといえる。